エヴェレストはどこへ行くのか？

池　田　常　道（日本山岳会会員）

１　登りやすい山、エヴェレスト

「これなら、私たちにもやれそうだって思ったの」

昨年亡くなった田部井淳子さんは生前、当時を振り返ってこう言っていた。「なぜ、いきなりエヴェレストだったんですか？」という問いに対する率直な答えだった。

彼女が、1970年アンナプルナⅢ峰に成功した後、「次は女だけで8,000メートル峰」を目ざしていたころ、目標にできる山の候補はそんなに多くなかった。まず、印パ紛争による登山禁止が続いていたうえに、シェルパのサポートが期待できないカラコルムは論外。チョー・オユーには、1959年国際女性隊や64年西ドイツ隊の遭難の記憶がまつわりついていた。日本人になじみぶかいマナスルにしても、71年にようやく、バリエーションの北西稜から第２登されたばかりで、今日のように、繰り返し登られるポピュラーな山ではなかった。

そもそも1970年の時点では、初登頂以降登頂を許したのはエヴェレスト（６回）のほか、チョー・オユー、アンナプルナ、ナンガ・パルバット（いずれも３回）、マカルー（２回）だけで、後の２座は再登がすべてバリエーション・ルートからなされていた。そんなとき、65年インド・エヴェレスト隊のモハン・Ｓ・コーリ隊長に見せてもらった映画で、冒頭の印象を持ったのだという。また、日本人の経験者も多いから、詳しい情報を得るにも好都合だった。世界最高峰といってもエヴェレストは、彼女らにとって、最もアクセスしやすい8,000メートル峰だったのである。

1980年のこと、1960年にダウラギリ初登頂を率いたマックス・アイゼリンは、その初登頂20周年を記念して、自ら経営するアイゼリン・スポーツが募集した公募登山隊を派遣した。8,000メートル峰では初めてのガイド登山である。隊員・シェルパ合わせて17人を頂上に送ったこの成功によって、それまでアルプスやアンデス、せいぜいヒマラヤやヒンズー・クシュの6,000メートル峰に留まっていたガイド登山が一気に8,000メートルの世界に進出してきた。こうした動きはマナスルやアンナプルナにも波及し、86年秋に至ってエヴェレストにまで及んだ。だが、当時はまだ「お客を登らせる」ノウハウが確立できず、頂上に立つのはもっぱらガイドやシェルパばかりで、高額の料金を払ったお客が不満を抱いたまま帰国することが少なくなかった。

しかし、90年代になると主催者であるガイド会社も態勢をととのえ、経験を積んだシェルパと旧ソ連製の大容量酸素ボンベをそろえて、出費に見合うサービス（登頂）を提供できるメドが付いてきた。公募登山ビジネスの成立である。

やがて１シーズンに３桁の登頂者を生むことも珍しくなくなり、その大半を公募隊のお客が占めるようになった。公募隊に属さない登山者も、彼らの切り開いたルートをたどって行けば頂上に立つ機会が得られる世になった。エスコートするシェルパのなかには２回、３回と頂上に立つ者も現れた。いまや。個人の最多登頂回数は21回に及んでいる。

２　７大陸最高峰以後

1970年までにアジア、ヨーロッパ、アフリカ、南

北アメリカの5大陸最高峰を登ったのは故・植村直己だったが、これにオーストラリアと南極を加えて７大陸を目標としたのは、アメリカの富豪ディック・バスである。

しかし、アジア最高峰のエヴェレストに登らなければ夢は完結しない。そのために彼は、数年間にわたる歳月と莫大な資金を費やしてエヴェレストに通い続けた。さまざまな登山隊に応分以上の参加費を払い、自前のガイドを雇って加わり、ときには登山隊まるごとのスポンサーになったりもした。そして85年、ノルウェイ隊の一員として念願の頂に立つことができた。

金持ちの道楽に過ぎなかった７大陸最高峰登頂は、その後、登山におけるひとつのタイトルとして一般登山者の目標にまで昇格、マスコミの好んで取り上げる話題になってしまった。

南極大陸への商業フライトが開通して以来、ヴィンソン・マシーフは手の届かない対象ではなくなって久しい。エヴェレストも、大枚はたいて公募隊のお客になれば、ガイドに登らせてもらえる山になった。そして、７大陸最高峰を目ざす登山者は、なにがなんでもエヴェレストの頂を踏みしめなければ済まないのである。

問題は、そのような人が目ざすエヴェレストは、彼らが登ってきた６大陸最高峰とはけた違いに高いということだ。６大陸で最も高い南米のアコンカグアよりも2,000メートル近く高いところにその頂はある。ふんだんに酸素を吸おうが、ベタ張りされた固定ロープをたどろうが、高所登山の難しさには各段のちがいがある。エヴェレストに登った人が他の６座を目ざすよりも、６座を登ってきた人がエヴェレストを混ざすほうが、はるかにハードルが高い。

また、世界最高峰だという唯一無二の事実も、７大陸最高峰を狙う人でなくても、登山者を引き付ける要因になった。75年の女性初登頂はまだしも、南西壁初登攀や無酸素による初登頂、新ルート、単独、アルパイン・スタイル……といったタイトルがこの山に人々を引き付けてきた。

登山史上の新記録という観点でいえば、男女それぞれの最年少や最高齢もあるし、〇〇国人として初めてというのもタイトルになりうる。さらには全盲、隻腕、義足、がん患者等難病と闘う人々――あらゆるハンデを背負った人々が、世のなかに勇気を与える存在として取り上げられる時代になった。

いま列挙した事例は、すべて公募隊あってのことで、隊の側もそれを売り物にしているのが実情だ。最年少記録を狙って息子を連れて行き、死にそうな目に遭わせた親もいれば、視力を失ったお客を放置して死に至らしめたガイドもいる。

３　1996年春の遭難

1996年春にネパール側で起こった遭難は、勃興しつつあった公募隊人気に水を差す事件になった。ロブ・ホール（ニュージーランド）とスコット・フィッシャー（アメリカ）がそれぞれ隊長を務める公募隊が、ルート上の混雑などで登頂時刻が大幅に遅くなったうえ下降中バラバラになり、両隊長を含む５人が亡くなったのである。

フィッシャーは途中で力尽き、ホールは、歩みの遅いお客をなんとか登らせようと深入りし過ぎた結果、酸素が切れて自力下山できなくなった。指揮官を失った両隊のガイドとお客たちはシェルパが先に下ってしまったので、最後のグループがサウス・コルの平坦地まで下りてきたところでルートを失い、あてもなく彷徨するうちに消耗した。その大半はキャンプからの救援を受けてテントに収容されたが、日本人で２人目の女性登頂者となった難波康子さんは助からなかった。

ほかの隊でも遭難事故があって、シーズンの犠牲者は、チベット側を合わせて12人にのぼった。米誌『アウトサイド』から派遣されてホール隊に加わっていたジョン・クラカワーはその顛末を『Into Thin Air』（邦訳名『空へ』、1997年刊）としてまとめ、反響を呼んだ。

この事件を教訓に、公募隊の側もお客の安全を図る手段を講じるようになってはきたが、ときにはほころびも出る。

2004年の春、大規模公募隊HIMEXの一行が、チベット側8,400メートル地点の岩陰に倒れていた英国人デービッド・シャープを発見した。随行ガイドはABCの隊長に通報したが、救助の手を差し伸べることなく頂上へ向かった。一行が帰途現場を通りかかるとシャープはまだ生きていて、同行したTV取材班がことばを交わし、その模様をカメラに収めた。

シャープは、カトマンズのエージェントが個人をまとめて便宜的に編成した隊の一員（これをインディペンデントという）で、彼の運命に責任を持つ仲間もリーダーもいなかった。結局、彼はそのまま帰らず、TV班は映像を公開しなかった。この日、HIMEX隊と合わせてトルコ隊など40人以上が、瀕死のシャープを横目に頂上への道を急いだという。

４　リンチ事件、大雪崩、大地震

初登頂60周年の2013年５月、おぞましい事件がローツェ・フェースで起きた。ルート工作に従事していたシェルパたちが、脇を通りかかったクライマーといさかいになり、腹いせに集団で暴力を加えたのである。

イタリアのシモーネ・モーロ、スイスのウエリ・シュテック、イギリスのジャナサン・グリフィスは、別ルートから無酸素登頂を目ざすため高所順応の足場として7,200メートル地点にキャンプを置いていた。３人はその日、このキャンプ目ざして、ロープも結ばずにフェースを登って行った。キャンプに向かうため右へトラバースすると、そこでは公募隊のシェルパたちが固定ロープを張ろうとしていた。３人が斜面に垂れていたロープをまたいで行こうとすると、トップにいたシェルパが大声で叫びながら懸垂下降してきて、セルフビレイも取らずに立っていたシュテックに体当たりしそうになった。

「オレたちのロープにさわるな」と、激高するシェルパと口論になり、彼らは作業を中止してABCへ下りてしまった。このとき、モーロがネパール語で侮辱するようなことばを吐いたといわれる。ABCに下りてみると他隊のシェルパも糾合して100人ばかりが集団を組んでモーロたちのテントを襲い、殴打と投石を繰り返して負傷させた。お前らを殺すと刃物を持ち出す者もいた。このとき、周囲にいた公募隊リーダーやガイドは傍観するばかりで、割って入ってとばっちりを食ったのはほんの２、３人だった。

身の危険を感じた３人はABCを放棄してBCに逃げ、シュテックはカトマンズに飛んで傷の手当てを受けた。この事態を重く見た観光省は当局者をBCに派遣して、両者の和解を演出した。騒動を首謀したシェルパ３人はBCから追放され、居合わせた公募隊リーダーたちも署名して和解書が作成された。

サウス・コルのルートがほぼ公募隊の専有物と化しているいま、登山者やお客は工作隊の先に出てはならないという暗黙の了解がある。しかし、エヴェレストは公募隊やシェルパだけのものではない。ロープなしでローツェ・フェースを上下する自由まで制限する理由はない。公募隊に慣れ親しんだ最近のシェルパたちは、「オレたちが登らせてやってるんだ」という過剰な意識を持ちはじめたようだ。

その翌年４月、今度はアイスフォールの大雪崩で13人のシェルパが死亡、３人が行方不明となった。当局は、喪に服すためまず４日間、のち７日間の登

山中断を決めたが、シェルパたちは納得せず、このシーズンの登山中止と犠牲者への補償金増額など12項目の要求を突き付けてボイコットした。当局の説得に応じて登山隊に復帰しようとするシェルパに対しては、公然と圧力が加えられた。結局、ラチが明かないと判断した公募隊は次々に撤収、観光省は向う５年間有効の許可をこれらの隊に与えた。

さらに2015年４月25日、ネパール全土がマグニチュード7.8の大地震に見舞われ、死者7,802人、重傷者１万5,911人、行方不明3,322人（５月８日内務省集計）という大きな被害を被った。山間部の村では、ランタン谷やロルワーリン谷のように集落が丸ごと土石流に飲み込まれたほか道路も寸断され、チベットに通じる道路も通行止めとなった。カトマンズや近郊の村でも多くの家屋が倒壊、住民はテントや仮小屋で雨露をしのぐ生活を強いられた。

エヴェレストBCでは、プモリとリントレンの間にあったセラックが崩壊、雪崩となってキャンプを襲い、18人が死亡、71人が負傷した。チベット側でも地震の影響で雪崩の危険が増したとして、４月27日に域内の高峰登山を差し止めた。マカルーやアンナプルナでも雪崩に遭うなどの被害はあったが死者はなく、全員自主的に登山を中止してカトマンズに向かった。ネ政府は当初、被害を受けたアイスフォールを修復してエヴェレスト登山を再開させるつもりでいたが、被害の情報が集まるにつれて困難と判断、遅ればせながら５月に入って登山中止令を出した。

５　殺到する登山者

2013年にエヴェレストに登った登山者とシェルパは南北合わせて658人に及んだ。地震から復興途上の16年には641人が山頂に立った。1998年、初めて延べ1,000の大台を超えた年は189人だった。2002年を最後に秋の登頂は記録されていないから、これだけの人数が５月の数週間に殺到する。登頂できなかった人数も含めると、行動する人数はもっと多くなる。まして、最近は、天気予報の精度が上がったからだれでも条件のよい日を選んで頂上を目ざす。その結果、１日の登山者が200人以上に及ぶこともある。

96年の遭難を契機としてルートの混雑ぶりが指摘されて久しい。ネパール側のヒラリー・ステップ、チベット側のセカンド・ステップは、登りと下りの登山者が交錯するのでとくに激しい渋滞が起きることは96年当時と変わりない。むしろ、２時間待ちなどといわれていたのが、いまでは３時間、４時間というのがざらにある。待たされる登山者は、寒風にさらされて冷え切り、無駄に酸素を消費する。

ローツェ・フェースには上下２本の固定ロープが張られるようになり、ヒラリー・ステップには懸垂下降用のロープが垂らされた。セカンド・ステップのハシゴは新しいものに付け替えられている。

しかし、これでスムーズな流れができるかというと大違いだ。登山者がけた違いに増加一方だからだ。中国もネパールも、登山料を払う外国人登山者が増えることは大歓迎だ。その収入は、とっくに国家の経済に組み込まれている。

最近のネ政府は、雪崩や地震が続いたことを受けて、登山者の安全に気を配っているという。観光省高官は、公募隊が連れてくる障がい者登山を規制しようと考えているようだ。彼らの登り下りのスピードののろいことが渋滞の原因だととらえているからだ。ネパール山岳協会のアン・ツェリン会長によれば、高官は内々その是非を打診してきたという。

しかし、いま快適なエヴェレスト登山を回復するには、そんな小手先の改革ではなく、思い切って総量規制に踏み切らなければならないだろう。エヴェレストで起きているすべての問題は、単純に人が山の許容力を越えて殺到していることにあるのだから。

Everest 2016 south side – Photos: Himalayan Club Kolkata

「Photus：Himalayan Club Kolkata から転載」